

令和2年度入学者選抜学力検査問題

国 語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 検査時間は、9時25分から10時15分までの50分間です。
- 3 大きな問題は全部で5問で、表紙を除いて7ページです。
また、別に解答用紙が(1)、(2)の2枚あります。
- 4 監督者の「始め」の合図があったら、すぐに受検番号をこの表紙と解答用紙(1)、(2)のきめられた欄に書きなさい。
- 5 答えは、必ず解答用紙のきめられた欄に書きなさい。
また、特に指示のあるもののほかは、各問いのア、イ、ウ、エのうちから最も適当なものをそれぞれ一つ選んで、その記号を解答欄の()の中に書き入れなさい。
- 6 答えの字数が指示されている問いについては、句読点や「 」などの符号も字数に数えるものとします。
- 7 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、筆記用具をおきなさい。

受 検 番 号

番

1

次の1から3までの問いに答えなさい。

- 1 次の——線の部分の読みをひらがなで書きなさい。
- (1) 地域の発展に貢献する。 (2) 朝日に映える山。
- (3) 友人の承諾を得る。 (4) まぶしくて目を背ける。
- (5) 地方に赴く。

2 次の——線の部分を漢字で書きなさい。

- (1) 歴史をケンキユウする。 (2) 図書館で本をカリる。
- (3) 意味の二た言葉。 (4) 費用をフタンする。
- (5) 英会話コウザに参加する。

3 次の、生徒たちが俳句について話し合っている場面である。これについて、(1)から(5)までの問いに答えなさい。

スケートの紐むすぶ間も逸りつつ

山口誓子

Aさん 「この句は、作者がスケート場で靴の紐を結びながら少年の頃を思い出し、早くスケートをしたいというわくわくした心情を詠んだものだそうだよ。」

Bさん 「作者の(①)のような心情やその場の情景が想像できるね。作品や作者についてよく調べることが俳句の鑑賞では大切なことだね。」

Cさん 「それも鑑賞の一つだけれど、作品や作者について調べるだけでなく、読む人によって様々な捉え方ができるのも俳句のよさだと思う。私は幼い子どもが初めてスケートをするときの情景を想像したよ。」

Aさん 「それもおもしろくていいね。俳句の十七音から色々なことが想像できるんだね。」

Bさん 「なるほど。確かに、AさんとCさんが言うように、(④) (④) のも俳句の魅力だね。」

(1) この俳句と同じ季節を詠んだ俳句はどれか。

- ア 山風にながれて遠き雲雀かな (飯田蛇笏)
- イ 名月や池をめぐりて夜もすがら (松尾芭蕉)
- ウ 音もなし松の梢の遠花火 (正岡子規)
- エ 淋しさの底ぬけて降るみぞれかな (内藤丈草)

(2) (①) に入る慣用句として最も適切なものはどれか。

- ア 胸が躍る イ 肝を冷やす
- ウ 舌を巻く エ 目が泳ぐ

(3) 想像と熟語の構成が同じものはどれか。

- ア 抜群 イ 海底 ウ 削除 エ 未来

(4) 幼いと同じ品詞である語は、部アからエのどれか。

(5) (④) に入るものとして最も適切なものはどれか。

- ア 音読を通してリズムや調子を読み味わうことができる
- イ 心情や情景を豊かに想像して読み味わうことができる
- ウ 作者による作品の解説に従い読み味わうことができる
- エ 表現技法の効果を取り上げて読み味わうことができる

次の文章を読んで、1から5までの問いに答えなさい。

浜の町といふに、島原屋市左衛門とかやいひし者あり。十二月初め、雪降り積もれる朝、用ありてとく出で、浜なる路をゆくに、雪のひまにあやしき物見えけるを、立ち寄り引き上げつるに、したたか重き袋にて、内に白銀大なるが三包ばかりとおぼしきあり。おどろきて、いかさま主有るべきなれば、やがてぞ尋ね来なましと、所を去らで二時ばかり待ち居たれど問ひ来る人もなければ、いかさま旅人の落とせしならんと、そこらの町くんだり、旅人の宿す家ごとに尋ね行きて、旅人のもの失ひたまへるなどやあるとあふ人ごとに問ひしに、その日の夕つかた、からうじて主にめぐりあひぬ。始め終はり詳しく尋ね聞きしに実の主なりければ、さきの袋のままにて返しはべりぬ。この主喜び拜みて、「我は薩摩国にて、たのめる人のくさぐさのもの買ひ求めにとて、我をおこせたるに、もしこの銀あらずば、我が命ありなんや。かへすがへすも有り難きことにはべるかな。」と、その銀を分かちて報ひしかど曾て取りあぐる事もせねば、力なく酒と肴を調へて懇ろに敬ひものして帰りぬ。

(長崎夜話草)から

- (注1) 白銀＝銀貨。「銀」も同じ。 (注2) いかさま＝きつと。
 (注3) 町くんだり＝町の中心部から離れたところ。
 (注4) 薩摩国＝現在の鹿児島県西部。
 (注5) くさぐさの＝様々な。 (注6) おこせたる＝派遣した。
 (注7) 曾て＝決して。 (注8) 懇ろに＝心を込めて。

1 からうじて は現代ではどう読むか。現代かなづかいを用いて、すべてひらがなで書きなさい。

2 出で、尋ね行き、失ひ、問ひ、の中で、主語にあたる人物が異なるものはどれか。

3 所を去らで二時ばかり待ち居たれど とあるが、市左衛門が待ち続けた理由として、最も適切なものはどれか。

ア 浜の路で待つように持ち主から言われていたから。
 イ 深く積もった雪のせいで移動ができなかったから。
 ウ 袋が重すぎて一人ではどこにも運べなかったから。
 エ 持ち主がすぐに戻ってくるだろうと予想したから。

4 有り難きこと とあるが、市左衛門がどのように行動したことを指すのか。三十五字以内の現代語で書きなさい。

5 力なく酒と肴を調へて とあるが、このときの主の心情として最も適切なものはどれか。

ア 銀貨を取り戻せてうれしいので、好きなだけ酒と肴を楽しみたい。
 イ 銀貨を受け取ってもらえないので、せめて酒と肴でお礼をしたい。

ウ 銀貨を渡すだけでは感謝しきれないので、酒と肴の準備もしたい。
 エ 銀貨を渡したくはないので、酒と肴を振る舞うことで解決したい。

次の文章を読んで、1から6までの問いに答えなさい。

人がものを考え、それを表現していくという行為は、感覚・感情（情緒）に支えられた思考・推論（内言）を、身体活動をともなう表現（外言）へと展開していくことだといふことができます。話したり書いたりするという活動は、まさしく、この自分の中の思考と表現の繰り返しの上に成り立つ作業であり、この往還の活性化こそが、言語活動そのものの充実につながる働きをしているわけなのです。

ここでとくに重要なのが、自己と他者の相互理解のプロセスです。

自己の内部での思考と表現の往還と同時に、⁽¹⁾自分と相手との間で起こる相互理解、すなわち、相手の表現を受け止め、それを解釈して、自分の考えを述べる、そうして、自分の表現したことが相手に伝わったか、伝わらないかを自らが確かめることによつて、自分の「言いたいこと」「考えていること」がようやく見えてくるということになるのです。

しかも、このとき見えてきたものは必ずしも当初自分が言おうとしていたものとは同じではないことに気づくでしょう。というよりも、当初の自らの思考がどのようなものであるかはだれにもわからず、この自己と他者の間の理解と表現のプロセスの中で次第に形成されるものと考える方が適切でしょう。つまり、自分の「言いたいこと」というものは、そんなにすぐにはつきりと相手に伝えられるようなかたちでは、ことばとして取り出すことがむずかしいということでもあります。

このように考えると、「私」は個人の中にあるというよりもむしろ、他者とのやりとりの過程にあるというべきかもしれません。

「自分」というようなものも、実体としてどこかに厳然とあるというよりも、あなたと相手とのやりとり、つまりは、あなたを取り囲む環境との間にあるということになります。それは、あなたの固有のオリジナリティは本当にあなたの中にあるのか、という課題とつながっているのです。

あなたは、成長する段階でさまざまな社会や文化の影響を受けつつ、いろいろな人との交流の中ではぐくまれてきました。同時に、あなた自身の経験や考え方、さまざまな要素によつて、あなたにしかない感覚・感情を所有し、その結果として、今、あなたは、世界にたった一人の個人として存在しています。この世に、あなたにかわる存在は、どこにもないといふことができるでしょう。

そして、このことによつて、あなたが見る世界は、あなた自身の眼によつていふこともできるはずですが、つまり、あなたのモノの見方は、すべてあなた自身の個人メガネを通したものでしかありえないということなのです。

あなたが、何を考えようが、感じようが、すべてが「自分を通して」いふわけで、対象をいくら し、事実在即して述べようとしたところで、実際、それらはすべて自己を通した思考・記述でしかありえないということになります。どんな現象であろうと、「私」の判断というものをまったく消して認識することはありえない、ということになるのです。

しかも、この自己としての「私」は、そうした、さまざまな認識や判断によつて少しずつつくられていく、 少しずつ変わっていくということが出来ます。

これまで出会ったことのない考え方や価値観に触れ、自らの考え方を振り返ったり、更新したりすることを通して、「私」は確実に変容します。

ですから、はじめから、しっかりとした自分があるわけではないのです。

ここに、いわゆる「自分探し」の罫かどがあります。

本当の自分を探してどんなに自己を深く掘っていても、何も出てきません。ちょうど真っ白な原稿用紙を前にどんなに頭をかきむしっても何も書けないのと同じです。

「自分」とは、「私」の中にはじめから明確に存在するものでなく、すでに述べたように、相手とのやりとり、つまり他者とのインターアクションのプロセスの中で次第に少しずつ姿を現すものです。

このように考えることによって、⁽³⁾あなた自身を「自分探し」から解放することができるのです。

(細川英雄「対話をデザインする」から)

(注1) 往還¹行ったり来たりすること。

(注2) プロセス²過程。

(注3) オリジナリティ³独創性。

1 自分と相手との間で起こる相互理解 を説明したものと最も適切なものはどれか。

ア お互いの考えを率直に受け止め批判し合うことにより、それぞれの立場の違いがさらに明確になっていくこと。

イ 相手の考えを自分なりに理解した上で自分の考えを相手に対して表現し、伝えられたかどうかを確認すること。

ウ 相手の考えと自分の考えの違いを認め合いながら、それぞれの異なる意見を共通する結論へと導いていくこと。

エ お互いの思考と表現を往還していくことにより、相手に対して自分の意見を伝えることは容易だと気付くこと。

2 あなた自身の個人メガネ とは何をたとえたものか。本文中から十三字で抜き出しなさい。

3 に入る語句として最も適切なものはどれか。

ア 情緒的に判断
イ 効果的に分析
ウ 主観的に認識
エ 客観的に観察

4 に入る語として最も適切なものはどれか。

ア あるいは
イ たとえば
ウ なぜなら
エ ところで

5 あなた自身を「自分探し」から解放することができる とある

⁽³⁾が、どのような状態から解放することができるか。文末が「状態。」となるように、「自分探し」をする上で陥りやすいことを踏まえて、四十字以内で説明しなさい。ただし文末の言葉は字数に含めない。

6 本文における筆者の考えとして最も適切なものはどれか。

ア 個人の言語活動が活性化していくことで意見を主張できるようになり、自分らしさが完成されていく。

イ 価値観の異なる相手と議論を重ねることで新たな発想が生み出され、利便性の高い社会が創造される。

ウ 周囲の環境と関わり合うことで他とは区別される自己の存在に気付き、自分が徐々に形成されていく。

エ お互いの立場を尊重しながら対等な人間関係を築くことにより、対話の成立する社会が実現される。

次の文章を読んで、1から6までの問いに答えなさい。

〔小学四年生の航輝は、船乗りである父と、母、小学一年生の妹莉央の四大家族である。三か月間の航海から戻った父は、家族と久しぶりの夕食時、重大発表があると言った。〕

「異動が決まってな。お父さん、陸上勤務になったんだ。これからは毎日、家に帰れるぞ。」

それは予想外の告白で、航輝は言葉の意味を理解するのに時間がかかってしまった。

——お父さんが、船を降りる？

「あらまあ、本当なの？」

信じられないとも言いたげな母に、父は深々とうなずく。

「この一か月の休暇が終わったら、営業の仕事に回されることになった。そのままずっと陸上勤務というわけでもないんだが、少くとも向こう何年かは船に乗ることはない。」

父の勤める海運会社は内航(注1)を中心としているが、営業などの部門で陸上勤務に従事する社員もいる。どうやら父は、ひそかに異動願を提出していたらしい。

「それで、勤務先は……。」

母が訊ねると父は、それなんだが、とちよつと言いにくそうにした。

「名古屋営業所なんだ。これから一か月で引越さなくちゃならない。」

「名古屋！ そんなこと、急に言われても困るじゃないの。どうしてあらかじめ相談してくれなかったのよ。」

「いや、俺もこんなにすぐ陸上勤務になれるとは思ってなかったんだ。ほんのひと月ほど前、試しに異動願を出してみたんだが、まさか即採用されるとはなあ。」

「莉央、転校するの？ いやだ！」

非難がましい母に追従するように、妹の莉央も甲高い声を発す

る。

父はばつが悪そうにビールを一口すすり、後頭部をかいた。

「これから家族で一緒に過ごせること、少しは喜んでもらえると思ってたんだがなあ。」

気まずい沈黙の中、航輝は父にかけるべき言葉を探していた。

母は折に触れ、父が子育てに協力できないことを批判してきた。

性格の父ではあるけれど、そんな母の言葉がまったく耳に入らず、心に刺さりもしなかったとは思わない。父なりに考えて、家族のためを思って行動した結果に違いはないのだ。だが——。

「お父さんは、それでよかったの。」

航輝の投げかけた質問に、父はやはり困ったような微笑を浮かべた。

「航輝も、お父さんと毎日会えるのがうれしくないのか。」

「ううん、ぼくはうれしいよ。それはとてもいいことだと思ふ。」

母の視線が鋭くなつた気もしたが、歯牙(注2)にもかけない。

「でもさ、それって家族のために陸上勤務を希望したってことだね。お父さんは本当にそれでよかったのかな。本当に、船を降りてもいいと思っていたのかな。」

すると父は虚を衝かれたようになり、何も答えずにビールの缶を口に運んだ。しかしすでに飲みきっていたようで、缶を軽く振って

食卓に置く。底が天板に当たってコン、と乾いた音がした。

「お父さんはそれでよかったのか、か……航輝も大人びたことを口にするようになったもんだな。」

おどけるように言った父は質問をかわしたかったらしいが、その企みはうまくいったとは言いがたい。三人のときよりも口数の

減った食卓で、航輝はせつかくのごちそうの味も何だかよくわからなかった。(4)

——お父さんはやつぱり、船に乗るのが好きなんだよな。

あれは二年ほど前のことだっただろうか。

小学校の授業で、自分の名前の由来を調べるといのがあった。

航輝が家に帰ってさつそく母に訊ねると、お父さんに訊いて、との返事。航輝の名前を考えたのは父だったらしい。

航輝はその晩、ちようど休暇で家にいた父に、あらためて名前の由来を訊ねた。そのとき父は風呂上がりで、首にタオルをかけて扇風機の風に当たっていた。

——おまえの人生という名の航路が、輝きに満ちていますように。そう願って、《航輝》と名づけたんだよ。

説明は簡潔でわかりやすく、ただそのあとで父は、照れ隠しのようにつけ加えたのだった。お父さんはやつぱり、船に乗るのが好きなんだよな、と。

そのときの一言ほど、実感のこもった父の台詞を航輝は知らない。(岡崎琢磨「進水の日」から)

(注1) 内航Ⅱ国内の港の間で貨物輸送すること。

(注2) 歯牙にもかけないⅡ全く相手にしない。

(注3) 虚を衝かれたⅡ備えのないところを攻められた。

1 父は、それなんだが、とちよつと言いくそうにした。とあるが、このときの父の心情として最も適切なものはどれか。

- ア 名古屋という新天地で営業の仕事をするこへの心配。
- イ 異動によつてますます家族から嫌われるこへの不安。
- ウ 家族の生活を急に変化させてしまうこへのためらい。
- エ これから毎日家族と共に時間を過ごすこへの戸惑い。

2 父はばつが悪そうにビールを一口すすり、後頭部をかいたとあるが、なぜか。四十五字以内で書きなさい。

3 に当てはまる最も適切な語はどれか。

- ア きまじめな
- イ おおらかな
- ウ せつかちな
- エ さわやかな

4 母の視線が鋭くなった気もした。とあるが、航輝がこのように感じた理由として最も適切なものはどれか。(3)

ア 航輝だけが父に味方するような発言をしたことで、母の機嫌を損ねたと思つたから。

イ 父を批判してきた母に航輝が反発を始めたことで、母を悲しませたと思つたから。

ウ 父に毎日会えることを喜ぶ態度を航輝が見せたことで、母が絶望したと思つたから。

エ 航輝が父を味方につけようとしたことで、母の怒りがさらに強まったと思つたから。

5 航輝はせつかくのごちそうの味も何だかよくわからなかったとあるが、このときの航輝は父に対してどのようなことを考えていたのか。傍線部に続く回想の場面を踏まえて五十文字以内で書きなさい。(4)

6 本文の特徴を説明したものとして、最も適切なものはどれか。

- ア 擬音語や擬態語を多用して家族の性格が描き分けられている。
- イ 過去の場面を加えることで新しい家族の姿が表現されている。
- ウ 豊かな情景描写を通して家族の心情が的確に表現されている。
- エ 主人公の視点を通して交錯する家族の思いが描写されている。

下の図は、日本語に不慣れな外国人にバスの乗り方について、係員が説明している場面である。係員の言葉を踏まえて、あなたが様々な国の人とコミュニケーションをとる際に心がけたいことを国語解答用紙②に二百四十文字以上三百字以内で書きなさい。

なお、次の《条件》に従って書くこと。

《条件》

(Ⅰ) 二段落構成とすること。なお、第一段落は四行程度(八十字程度)で書き、第二段落は、第一段落を書き終えた次の行から書き始めること。

(Ⅱ) 各段落は次の内容について書くこと。

第一段落

・外国人にとってわかりやすい表現にするために、下図Bの係員の言葉ではどのような工夫がされているか。下図Aの係員の言葉と比較して書くこと。

第二段落

・第一段落に書いたことを踏まえて、様々な国の人とコミュニケーションをとる際にあなたが心がけたいことを、体験(見聞したことなども含む)を交えて書くこと。

